

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	児童デイサービスここから			
○保護者評価実施期間	令和6年 12月		～	令和7年 1月
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	40件	(回答者数)	19件
○従業者評価実施期間	令和7年 1月			
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	9件	(回答者数)	6件
○事業者向け自己評価表作成日	年 月 日			

○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的にやっている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	ハード面が良好な環境 指導訓練室のスペースが広く取られ、カームルームや庭も付設されているなど、この地域の放課後等デイサービスとしては環境が恵まれている。また、児童発達支援や短期入所、居宅介護、相談支援などの事業所が併設されており、サービスを併用する利用者の連携がとりやすい環境にある。	広い分雑多になりやすい傾向があるため、おもちゃを写真で一覧表示して収納した。子どもが遊びたいおもちゃを出すときには職員にコミュニケーションを取る形にし、整理された環境を維持できるようにしている。スペースの活用については職員間で何度も話し合っており、今後子どもにとって分かりやすく遊びやすい環境を模索していきたい。	庭に置いていたベンチテーブルが古くなったため、廃棄した後に庭の活用方法を考える。公園に行きたくても行けないこともあるので、庭でも何かしら発散できるような遊びの工夫があると良い。部屋は広い一方で収納は多くないため、収納との兼ね合いを考えながらおもちゃや本についても整理しつつ充実させていきたい。
2	活動プログラムの工夫 美術系や音楽系などの学校を卒業した職員が在籍し、職員がそれぞれの得意を活かしてプログラムを考案、実施している。外部講師によるプログラム実施や、学校の長期休業期間中は積極的に外出活動を行うなど、子どもたちが様々な体験をして楽しめるよう工夫している。	子どものできること、得意なことを考えながら作業の工程を組んでいる。上手くいかないこともあるが、可能なかぎり「できた！」という達成感が得られ、自分に自信が持てるような活動を意識している。また当然年齢によってできることも集中力も大きく変わるため、年齢や発達に応じて職員が介入しすぎないようにしつつ支援している。	音楽、芸術、工作、運動、食育など様々な活動を行っているが、ICT機器を活用してコミュニケーションゲームが行えるような活動もしていきたい。また、外出プログラムの際、安全が図れるだけの人員がいれば電車などの公共交通機関を利用するようにしており、より社会と関わる機会が増えるような活動を実施していきたいと考えている。
3	保護者会プログラムの工夫 保護者との連携が図りやすくなるよう、保護者会を年二回開催している。基本スタンスとして、保護者への情報提供、支援の様子を共有、保護者同士の交流などを目的としている。親子で参加できる活動や先輩保護者、スーパーバイザーの講話などのプログラムを実施している。	参加して良かったと思われるような活動を提供したいと考えている。一回は親子参加での活動、もう一回は保護者にとって有益な講話などを開催できるよう、事業所単位ではなく法人全体で協力者を募っている。また、保護者同士の交流の重要性を感じており、学年や学校を超えて地域社会で繋がっていけるような関係性が築ける場に出来たらと考えている。	音楽や食育に関する親子活動を実施してきたので、芸術工作や外出活動なども保護者参加でできるような活動を模索したい。講話については講師を招くのが難しいが、保護者にとって関心事であるテーマ（たとえば学校卒業後の暮らし方やお金に関するテーマなど）について話ができる人を探していきたい。

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	職員間の情報共有 支援終了後の振り返りなどは、清掃や送迎業務の都合で実施時間が確保できなかったり、参加できない職員がいたりすることが問題である。個別支援計画についても常に全ての子どもの支援要点を頭に入れておくことが難しく、工夫が必要である。	職員の勤務時間の都合や支援業務（特に送迎）によって時間を確保することが難しい。いままですべての支援ノートを作成するなどの工夫を行ってきたが、作成する時間の確保や周知共有することの難しさを感じている。効率的に子どもの支援要点を確認できるようにし、気付きを簡潔に記録できるようなシステム作りが必要である。	支援前ミーティングでは送迎の確認、子どもの支援に関する特記事項の確認などを行っている。そのタイミングが一番支援要点を確認しやすい時間なので、簡潔にまとめられた支援指示書のようなものを用意すると良いかもしれない。試行錯誤の中で非常勤職員やドライバーを含めて大事なことがしっかり共有できる形を見つけていきたい。
2	地域交流の機会の確保 隣が同法人の保育園という環境が活用できていない。保育園のプログラムや午睡など、お互いの都合もあるが、何かしら連携を取って交流の機会が作れると良い。法人の理念としても、実施したいところである。	社会的活動（買い物や公共交通機関の利用等）など、対大人となる地域交流の機会は増えてきているが、子ども同士というテーマで考えると安全管理や何ができるかというところで難しさがある。また、同法人といっても保育園と当事業所は部署違いとなるため、職員同士のやりとりがあまり積極的にできていないことも大きな要因である。	園長先生と相談し、お互いの子どもたちにとってどのような体験が必要なのか、またどのような配慮が必要なのか、話を詰めていく必要がある。保育園の子どもたちが、障がいのある子どもたちを怖がってしまうことがないよう、楽しい体験を提供したい。音楽活動など、どの年代の子でも楽しめるような活動を通して交流が図れると良い。
3	卒業後の支援情報の提供不足 12年間という長い時間の積み重ねを、卒業後の進路に情報共有できていない。就学支援シートのような書式も探した限りは見つからなかったが、事業所独自の書式を作成して、ここでの成長の様子や配慮事項などがまとめられて伝えられると良い。	そもそも就労継続事業所や生活介護事業所との交流はほとんどなく、一部事業所の施設公開に訪問させていただく程度となっている。子どもの成長について、12年間在籍して子どもを支援し続ける職員も稀であるため、子どもごとの記録を整備する必要がある。	課題1の支援要点と合わせて、子どもの支援に関わる記録を整備する。問題は記録を記入する時間の確保であり、普段の業務の中で新たに仕事を増やすことなく記録できるような体制を構築しなければならない。保護者とのモニタリングに有効に活用できるような形にもしておきたい。